

陽炎の夏
最終回

著／芹沢藤尾

昨秋の準優勝校は、やはりそれまでの対戦校とは比べるべくもない圧倒的なオーラを放っていた。

中村は先頭バッターに二塁打を打たれ、バントで三塁に進塁を許すと、三番の犠飛であつという間に一点を失ったが、続く四番を空振りの三振に仕留めた。だが、二回、三回は無失点に抑えたものの、耐策策にでた相手にそれぞれ二十球以上の球数を放らされ、四回の守りが始まったところで、山田は直樹に登板の準備を告げた。

青桐のナインが、中村の球威が衰えたところで大攻勢に出るとは分かりきっていたので、その前に手を打とうと考えてのことだった。だがこの場合、問題はむしろ中村が四回を投げきる事が出来るかということだった。

初回に一点を楽に取った青桐と違い、雪乃華はこの試合未だ無得点。二回に藤岡が変化球をライトに流し打ったのが唯一のヒットという状態で、そこから犠打の一つも打てていないという現状では、次の一点を取られることは、すなわち敗北に等しかった。

中村は四回の守りも十八球を投げさせられた。それでも二十球放らずに守りが終わったのは、相手の火の出るようなライナーが、突っ立っていたセカンドのグラブに自分から飛び込んできたからだった。

その回の攻撃をきっちり三人で切り捨てられ、五回の守りに入る直前に、山田はピッチャーの交代を審判に告げようとして、背中から中村に肩をつかまれた。

「まだ、投げられます」

「バカいうな。見るからに死にそうな顔してるじゃねえか」

「まだ大丈夫です」

暑さと疲労で見えるからに辛そうな中村の目は、それでも死んでいなかった。

二年生の身で、全国レベルの、それも重量打線を武器とするチームと公式戦で初めてぶつかり、すでに百に近い球数を放っている。精神的にも肉体的にも辛はずだろうに、それを執念で抑え込んでいる後輩の気迫に、直樹は素直に感心した。

同じような状況に追い込まれ、それでもなおこれだけのことを言える投手は、そうはいない。

「投げさせてやれよ」

「竹井!? バカ抜かすな。今の状態で中村をマウンドに送ったら火達磨にされるぞ」

「されません!」

「お前は黙つてろ!」

山田の恫喝がベンチに響いた。何事かと守備につこうとグラウンドに向かっていた選手達が振り返り、異変を感じた審判がこちらに向かつて歩いてくる。

山田は慌てて口を押さえたが、もう後の祭りだった。

「山田。さつさと主審のところについて、何もないうってこい」

「竹井」

「中村のことは、俺に任せろ。この一回だけは持つようにしてやる」

自信たっぷりと言い切って、未だ悩んでいる様子の山田のケツをせつついた。

山田は明らかに困惑していたが、それでもどうにか平静の仮面を取り繕って、主審のところに向かった。

「さて、中村」

直樹は恋女房の後姿のため息を一つついて、中村に向き直った。

「正直、辛いだろ？」

「……大丈夫ですよ」

「望月にいいところ見せたいか？」

それまで強張っていた中村の顔が、一瞬で茹蛸のように沸騰した。

「な、とっ、ばっ、いつ、そっ、もっ、だ!？」

たぶん、何突然バカなこと言ってるんですか、そもそも望月って誰ですか、と言いたかったのだろう。

「誰もクソも、マネージャーの名前じゃねえか。もうちよつともなとぼけかたしろ」

「いつ、だっ、そっ!？」

「いつ、誰から、そのことを？」

茹蛸になったまま、さつきまで疲労で死に掛けていた様子はどこへやら、勢いよく首を縦に振る後輩に、苦笑いを浮かべた。

「そんなん見てりゃわかるよ」

「そっ、まっ、み?」

それ、まさか、他のみんなも?

「心配するな。まだ気付かれていない。……次打たれたらバラすけどな」

中村の茹蛸の赤ら顔が、一瞬で青白く染め直される。信号機でもなかなかこうはというほどに、それは見事な変わりようだった。

「もはや野球部の紅一点となったマネージャーを取られた上、滅多打ちにされて負けたとあつては、こりゃどんなひどい目に合わされるかわからんなあ」

「……」

「若い身空だ。命は惜しいよな」

もはやほとんどヤクザのようなセリフを口にしたがら、直樹は優しく中村の肩に手を回す。

「死にたくなけりゃ、死ぬ気で抑えな。そしたらあとは、俺が引き継いでやる。秘密と一緒にな」

「……本当ですね?」

探るような後輩の問いに、にんまりと微笑んで直樹は頷いた。

「必ず抑えます」

先ほどまでとはまるで違う、悲壮な決意を固めた表情で、中村は頷いた。

直樹は審判からの詰問から開放された山田に、親指を突き立てて合図を送る。

何があつたのかは知らないが、力強い足取りで胸を張り、マウ

ンドに向かつていく中村の姿に、山田もようやく折れたようだった。

と、気合たっぷり足取りでマウンドを登った後輩に直樹は一つ、訊き忘れたことがあったのを思い出した。

「お〜い、中村あー！」

なぜかひどく怨みのこもった視線を返されたが、かまわず直樹は訊いてみた。

「ちなみにコトはもう済ませたのか？」

可愛い後輩はその質問には耳も貸さず、親の仇でも見るような目で山田のキャッチャーミット目掛けて打球練習を始めた。

その回を、彼はヒット一本の三振二つで失点することなく切り抜けた。

突然立ち直り、その後ぐったりと死んだようにベンチに戻った中村の姿を見て、いったいどんな魔法を使ったのかと問い詰める山田に、直樹は完全に無視を決め込んだ。

ベンチでタオルを頭からかぶったまま、視線だけでこつちを射抜いてくる後輩を見ると、どうにも我慢ができない。ひよつとして自分はSなんではなかるうかと考えて、間抜けな思いに再度苦笑した。

試合の最中だというのに、こんな場面でリラックスしていることが、直樹自身可笑しかった。

試合のほうは未だ一対〇で負けている状態で、残された攻撃の

チャンスはすでに半分を切っていたが、それでも悲観的な気持ちにならずに済んでいた。

青桐は打撃をウリにしたチームではあるが、伊達に昨秋準優勝したチームではない。投手陣もそこらの名門校がはだして逃げ出すほどの厚い壁を誇っており、雪乃華の貧弱な打線では、打ち崩すのは至難の業だ。唯一まともにヒットを打っているのは五番の藤岡だけで、彼はその抜群のセンスで青桐のエース平野の変化球を、巧みに右方向へと流し打っていた。

「多分ですけど、平野は変化球を投げる時、心持ちアウトステッブになります」

二度目のヒットを打ったあと、ダブルプレーでベンチに戻ってきた藤岡は自信なさ気にそう言った。

山田はすぐさま打席に立っている二年生にタイムを取らせ、平野の足の位置を確認することを伝え、ヒットを打たなくてもいいから、とにかく粘るよう指示した。

その打席で、彼は信じられないほどの集中力を発揮して七球粘ったあと、八球目でキャッチャーフライを打ち上げた。

「全部の球がアウトステッブになるわけじゃないようです。でも、チェンジアップの時だけはアウトステッブになるみたいです」

それは、夏前に発行された、今年の夏の有力選手を載せた雑誌には書かれていない球種だった。

「なるほど。覚えてたての変化球でコントロールに不安があるんだな。それが無意識のうちに足を開かせるんだ」

攻撃のチャンスを一四回残し、雪乃華の作戦はチェンジアップを狙った耐球作戦に決定した。

「うちのエースにしてくれたこと、百倍にして返してやるうじゃねえか」

「ういっすー」

真つ黒な笑顔で腕を鳴らす山田と、彼に負けない黒さで頷くナインに、まったく本当に頼りがいのある連中だと、直樹は思った。

そこから先は、まさに消耗戦と呼ぶにふさわしい戦いだっただ。

打撃能力が高くない雪乃華の低位打線は、せめてツーストライクまではバットを振らないという作戦に出ても、三人で十五球と粘れなかったが、一番打者の佐伯は八球、二番打者の内海にいたつては、一人で十球も粘り、後ろで見ていた両チームを驚かせた。

二人がそれほどのバットコントロールを持っていることを、ナインの誰もが気付いていなかったのだ。

報復の報復とばかりに、青桐ナインも直樹のスタミナを奪いに来たが、直樹はそれに対し、初球に敢えて緩いボールを多投することで相手チームの打ち気をはやし立てた。

投手と打者の双方の忍耐力を測る持久戦となったが、先に平常心を失ったのは、意外にも青桐のほうだった。粘ることを目的とした戦いをしていただけとはいえず、八回になっても未だ一得点。六回に投手を変えられてからは、六つの三振を奪われ、逆に進塁できたのが四球一つと四番の単打一つという状況が、名門校に予想以上のプレッシャーをかけていたのかもしれない。

直樹はどんなプレッシャーの中であっても、ひたすらに河川敷で続けていた、水とギアの投球イメージを保とうとしていた。

体全体を一つの水流のように、一体として球を投げながら、同時に腕の各関節を別個の存在として認識し、それらを組み合わせることで力を発揮する。

全体運動の流動化と、個別運動の組み立て。それは、直樹の野球の師である従兄が教えてくれた、一つの感覚だった。

「投げきった瞬間にな、わかるんだよ。今自分の体がきれいに流れていることを。それと同時にがっちり腕の中で歯車が噛み合って、応えるように力があふれてくるんだ」

そう言っていた従兄も、何度もその感覚を覚えているわけではないらしい。じっくり体を調整しながら練習しているときに数度、実践の中ではそれこそ一度か二度、ある程度らしい。

それはきつちりとした基礎固めをした投球フォームの中にあつて、なお入り込むわずかな差異。それがすべてプラス方向に動いたときに発揮される、そのときの自分の最高のボール。

ひじ関節の稼動域が広い直樹は、それを習得するために、感覚の意識をわずかに水に重くおいた。

水とギア。未だ心底感覚として理解できたことはないが、そこそが直樹が自分のピッチングの基礎として心に置いた、一つの信念だった。

九回を投げ終え、二死二塁のピンチを八つ目の三振で切り抜けた直樹は、マウンドを降りながら、観客席の中に黒沢夏樹の姿が

ないかを、その日初めて意識して探した。だが本当は、無意識のなかですっと彼女の姿を探していたことにも気付いていた。

雪乃華の最後の攻撃で、それまで沈黙していた打線がようやく火を噴いたのは、その直後だった。

二番の内海が打った、なんてことのない内野ゴロを、前進していたサードが信じられないようなトンネルをしたのだ。エラーで出塁した内海を、三番の松岡が丁寧を送る。一死二塁の場面、次のバッターは、この日ノーヒットの山田だった。

山田はバットを万力のごとく握り締め、ゴルフのスイングを思わせる極端なアツパー気味の素振りをしながら打席に入ると、あつという間にツーナツシングに追い込まれた。だが、そのまま終わらないのが四番の四番たる所以なのか。

彼はその後続けて襲い来る速球を、それまでのアツパーシングとはかけ離れた丁寧なバットコントロールでファールに粘り続けた。

体勢を崩しながらも五球目の外角ストレートを流し打ち、その打球はライトのファールゾーンにあるベンチに凶悪なライナーとなって飛び込んだ。

それを三振前の馬鹿当たりと取るか、平野のボールを捕らえてきた証明なのかと捉えるのは意見の分かれるところだろうが、青桐のバッテリーはそれを後者だと判断した。そして、それが彼らの命運を奪う結果となった。

耐球戦で入った力みを抜こうとしたのだろう。平野はなにか変

化球を投げようとし、それが運悪くすっぱ抜けた。

真ん中高めという絶好のゾーンに何の警戒心も感じさせず入り込んできたその球は、山田の丁寧な、それでいて非常識なバットスイングの中に、力なく飲み込まれた。

弾丸のような勢いで、自身の頭上を通り抜けたその打球の行方を見ようとせず、平野はその場に崩れ落ちた。平野だけではない。そのとき守備についていた青桐ナインのすべてが、球場に押しかけ、彼らの勝利を信じて疑わなかった両校の応援団が、ベンチにいた雪乃華野球部員と、二塁上で立ち尽くしている内海も、全員がバックスクリーンに突き刺さる、打球の行方を見守った。

ただ一人、両腕を何度も突き出して、歓喜の悲鳴を上げる山田だけが、ゴムマリのように何度も跳ねながら一塁ベースをゆつくと廻っていた。

涙を浮かべる青桐と、未だ自分たちが勝ったことが信じられない雪乃華の両校が、ぞろぞろと鈍い足並みでホームの前に一列に並ぶ。

礼をし終わった両校は握手をし、分かれた。青桐の平野はうつむき咽びながら、最後まで顔を上げることにはなかった。

彼のその姿に、しかたのないこととは思いつながらも、直樹は胸が痛んだ。

おそらくは、彼は自分などよりもはるかに強い想いで野球に打ち込んできたのであり、その想いが今日、断られたのだというこ

とが、分かってしまったからだだった。

そんなことを思ってしまったばかりだったから、その日の夕方、美術室で中嶋と他愛もない雑談をしていた時に、俊哉が『水蓮』から電話をかけてきたのには驚いた。

電話相手のことに気付かない中嶋が「女か？」と茶化したのが、颯天に拳骨を喰らわせて黙らせた。

「高校球児がバーから電話とは穏やかじゃないな。バレたら出場停止もんだぜ」

「そんなことはどうでもいい。……いや、よくはないが、この際仕方がない。とりあえず店の前に来い。話したいことがある」

俊哉はそれだけ告げると電話を切った。ただならぬものを感じて、中嶋が椅子から腰を浮かせた。

「心配するな。こんな時期だ。無茶はしないさ」

中学からの知り合いである中嶋は、直樹と俊哉の確執を知って穏やかでいられないようだった。

「念のため、俺もついていく」

「大丈夫だよ。それに、それじゃ多分、あいつの用事が終わらない。人見知りするやつだからな。知らないやつがいると、緊張して言いたいことが言えなくなる」

そういえば、去年は多分、それで殴り合いにならなかつたんだろうなどと、そのとき一緒にいた黒沢のことを思い返して、直樹は苦笑した。

待ち合わせ場所である『水蓮』の前に行くと、俊哉はサンングラスもかけずにマスターと並んで立っていた。甲子園のスターがこんな時間にこんな場所にいるとなつたら、マスターの格好のネタにされるだろうに、本人にそんな自覚がないのか、あるいはそうなつてもマスターが事情を説明すると思つているのか、彼は十年来の友人を迎えるように、気さくな様子で手を上げた。

「気持ち悪い真似をするなよ。一杯やるために呼んだわけでもないだろ」

「当たり前だ。ついでに言えば、殴り合いをするつもりもねえよ」
浮かべていた気さくな笑みをさっと消して、その奥から闘犬の様な表情が覗いた。

「試合が終わつたばかりだったのに、呼び出して悪かつたな。明日の試合に勝つ前に、話しておきたいことがあつたんだ」

「？ いまさらなんだよ？」

「その前に、ちよつとキャッチボールでもしないか」

「……は？」

わけも言わずに人を振り回し続ける昔馴染みに、直樹は本気で首をかじげた。

俊哉につられるままにきたのは、一年前、お互いが復帰戦として戦つた、河川敷のグラウンドだった。ナイターも付いていないグラウンドには、薄暗い外灯と、周囲の民家から漏れた灯

りと、時折陸橋を通る電車の光だけがあった。

二人がグラウンドの外野に立つと、俊哉が最初にボールを投げた。二人ともグローブはつけていなかったが、俊哉が持ってきたのは軟式のゴムボールのため、直樹も警戒せずに素手でそのボールを受け取る。

練習のときのように自分の内側に意識を向けながら、薄明かりの中で陰になっている俊哉に向けてボールを返す。

俊哉は動かずに、そのままボールを胸の前で受け取った。

そのまましばらく、二人は特にこれといって話もせず、無言でキヤッチボールを続けた。

十分ぐらいそうしていた後、いい加減馬鹿らしくなって、直樹が言った。

「ったく、こんなことでいちいち呼び出すじゃねえよ」

「明日勝ちましたら、できないだろ。ベスト十六をかけて戦う両校のエースが、二人つきりで密談なんてよ」

「てめえらが勝つことは確定済みかい？」

「俺たちが負けると思ってるのか？」

自信満々に訊き返してくる俊哉に、それもそうだなと思いがながら、なんとなく悔しくて、直樹は皮肉交じりに返した。

「千回やれば、一回くらいはまぐれで負けちゃうかもしれないぜ」

「今日青桐がお前らに負けたみたいにな、か？」

若干強いボールが、顔に向かって返ってきた。

仕返しに、少しだけ力を込めたボールを股間の辺りに返して

やった。

「正直、驚いたよ。青桐が負けるなんてな。俺たちできえ、去年の秋には苦戦させられたのに」

「運がよかったのさ」

「ああ、運だよ。平野のバカが、最後の最後で失投なんかしなければ、俺は今頃、高笑いしながらベッドで気持ちよく眠っていたんだ」

吐き捨てるようなセリフの後に、胸元に勢いよくボールが飛び込んできた。

加減しろバカ、と毒づいて、ボールを返す。

「青桐と戦うことが確定して、何で高笑いで寝てられるんだよ、お前が」

「お前が俺と戦う前にくたばってくれからさ！」

明かりの薄いグラウンドの中で、声だけが返ってきた。

「高校に入って、強豪の中でもまれて、勝ってきた。チームメイトに、敵に、プレッシャーに。そして勝ち続けた。全国の強豪を相手に、唯の一つも負けることなく、完璧な成績で春のセンバツに挑んで、日本一にも輝いた。お前よりも強い投手なんか、腐るほど見てきたさ。お前よりも速いやつも、コントロールのいいやつも、度胸のあるやつも見えた。だけどお前にだけは勝てないままだ！」

叩きつけるような言葉が、直樹の胸を叩いた。それは橘葵が二人を繋いでいたときできえ、彼が爆発させたことのない感情だっ

た。

「今だってそうだ！俺はお前が青桐に勝つなんて、欠片ほども思っちゃいなかった。いやな予感ではしたが、そんなのは気のせいだ。だが勝つたのはお前らだ。千回やって一度勝てるかどうかもわからないお前らが、青桐を破っちまった。俺はまたお前と戦える。でもそれは明日の試合に勝てたらの話だ！明日勝たなきゃ、俺はお前への挑戦権さえ手に入れることができない。春のセンバツ王者の俺たちがだ！」

俊哉の中で押さえ込んでいた感情が爆発する。川沿いの道を歩いていた帰宅中のサラリーマンが、何事かと目を向けたが、俊哉に睨まれると、彼はそのまま我関せずを決め込んで、そそくさと足早に去っていった。

「明日の試合、俺は何が何でも勝つてやる。何が何でも勝つて、今度こそ、お前を叩き潰してやる」

近づいてきた俊哉が、暗闇の中で直樹の胸を突いた、苦惱と怒りと混乱でごちゃ混ぜになった感情が、その拳から伝わってくる。「貸しは返してもらどうぞ。今日はそれが言いたかった」

「……つい最近まで、それでもかまわないと思っていたんだがな」

胸の前に突き出された拳を握り、正面から、俊哉の目を見返した。「最近、気が変わった。勝ち上がって来いよ日本一。お前を叩き潰して、借りは今度こそ真正面から踏み倒させてもらおうぜ」

掴んでいた手を振り払う。

俊哉の横を通り過ぎて帰ろうとしたとき、闇夜に混ざって消え

ていく、彼の咳きを聞いた。

「俺は、お前が嫌いだ。葵のことだけじゃない。俺は、お前が大嫌いなんだよ」

翌日、明口の一方的な試合展開は、暴力的という言葉を通り越して、いつそ清々しいものがあつた。

打つては毎回得点の五回十四点、投げては四回まで三振十の完全試合ベース。運良く二回戦を勝ち上がった万年一回戦の公立高校は、トップバッターに放たれた俊哉の百五十キロの速球をグラウンドで見た瞬間に、すでに戦意を喪失していた。

試合前の段階で公立高校の勝算など、すでに銀河の果てで彷徨っている星屑みたいなものだったのに、いざ試合が始まれば、それはもはや宇宙の彼方にまで消し飛んでしまった。

予選での、参考記録の完全試合などに興味があるわけでもなからうが、明口は最後の守りでも、俊哉をマウンドに投入した。彼は最初のバッターには意外にも力を抜いて（それでも百四十キロ台は軽く出ているはずだが）投げたので、まだ余力は存分にある様子だった。

公立高校のバッターが身を縮めてバッターボックスに入るのを見て、直樹はスタンドの席を立つた。こんなところでいちいち俊哉の晴れ姿を見るのが馬鹿らしく思えたからだ。最前列の席でテレビカメラを持った望月と中村がなにやら試合そっちのけで語り合っていたようだが、今日は気分がなかつたので茶化すのはやめ

ておいた。

試合の結果は球場の門をくぐるころには、高鳴った歓声が教え
てくれた。

「明日の試合の相手が決まった」

美術室で真つ白なキャンバスを前に筆をいじくっていた黒沢夏
樹は、その声に無反応を決め込んでいた。半年以上顔を合わせる
ことも避けていたので、直樹も今更ながらにバツが悪く感じてい
た。

「お前のこと、ヤブ医者から聞いたよ」

彼女の華奢な肩が、小さく震えた気がした。

「そのことで、どうこう俺は言えない。力になるなんて、おこが
ましいことも、無関心を決め込むつもりもない。だから」

せめて、できることがあったら、言ってくれ。そう言って、美

術室を後にしようとした直樹の背に、

「先輩」

無感情な質問が飛んできた。

「先輩は、今度はいつ、野球を辞めるんですか？」

それは、本当は誰に対して向けられた質問だったのか。

真つ白なキャンバスに向いたままの黒沢に、直樹は穏やかな思
いで答えた。

「きつと、次の試合かな。だから、お前に見届けてもらえたら、きつ
と嬉しいだろうよ」

「……そうですね」

そのときの言葉を、かすかな期待とともに思い返したのは、明
口との試合でホーム前に整列し、戦意に満ちた北村俊哉の顔を見
たときだった。

今大会、初めて先発としてマウンドの土を踏んだ直樹は、これ
が自分の最後の試合になるという確信にも似た予感を改めて抱き、
祈りにも似た思いを込めて、スタンドに一度だけ目を向けた。

そこに探し人を見つけないことなく、主審がプレイと声を上げる。
夏の陽光が球場を埋めていた。

明口のバッターがボックスに入り、構える。

直樹は意識を切り替えて、山田の構えるミット目掛け、最初の
一球を放った。

球場の空気は、どこか潮騒を思わせる雰囲気になっていた。

双方のスタンドにはそれぞれの学校の応援団が詰め掛け、平日
でもないのに学校指定の制服を着た人間達で溢れ、彼女のように
私服姿の人間はむしろ珍しい方だった。

勝てばベスト十六が決定し、県下の強豪に名を連ねられると
あって、雪乃華の応援団にも、それまでにはない数の関係者が詰め
掛けていたが、相手校の応援の気合の入れようは、まるで甲子園
の決勝かと思うほどの力の入れようで、夏樹ははじめて高校野球
というものの人気の高さを思い知らされた。

野球部が同好会の頃から雇われマネージャーとして野球に携わってきたが、こうしてグラウンドの外から野球を見るのは初めてだった。

考えてみればそれもおかしな話だと、今更ながらに呆れてしまった。

試合開始まではまだ時間があり、シートの空きはむしろ雪乃華の方が散見されたが、あえてどちらよりでもなく、黒沢夏樹はバックネット裏の中央席に腰を下ろした。

グラウンドで戦う選手達には厳しい、夏らしい気候だった。

白い太陽が、じりじりとグラウンドを照らしている。

両手の中に握ったスポーツ飲料をじつと眺めていると、肩に手を置かれた。

振り返ると、照りつける太陽を思わせる笑顔で、見覚えのある少女が立っていた。

同じ年くらいだろうか。明口の制服を着いた彼女は、ひさしぶりと気安く声を掛けてきた。

「どこかで、お会いしましたか？」

「うん。去年のイヴに。デートのお邪魔をしちゃったわ」

「……………」

「怖い顔しないで。さすがに今は邪魔しないわ」

「あれはデートじゃないです」

「あいつもそう言ってたわね。ヘタレすぎて愛想も尽きた？」

「詳しいんですか？ 先輩のこと」

「まあね、昔ちよつと付き合ってたし」

多分、本当のことなのだろう。こちらを挑発するような言葉に、自然、眉根が寄ってしまう。

「球場に来るのは、はじめて？」

「ええ。先輩から来てくれと言われて」

挑発に乗ってしまうのは悔しかったが、言葉の方が先に出てきてしまった。

彼女は愉快そうに口元に手をやり、堪えられないように笑いを漏らした。

子供じみた怒りがすつと引いていき、代わりに自分の態度への恥ずかしさに頬が熱くなる。

誤魔化すように顔をグラウンドに向け、ぶつきらぼうに口を尖らせた。

「なまえ」

「え？」

「名前、教えてもらえませんか？」

背中の少女の目が、きょとんと見開かれるのが分かった。からからと、鈴の音のような声がかぼれてきて、夏樹は頭を沈めた。

同じ高校生のはずなのに、どうしてこどもも自分は子供なのか。

「たちばな。橘葵っていうの。あなたは？」

「……………黒沢夏樹です」

「よろしく黒沢さん。ねえ、席を向こうに移さない？ ここだとグラウンドの連中から簡単に見つかっちゃうのよ」

「隠れてるんですか？」

「ううん。探させてやってるの。うちのヘタレが、ベンチから見守られてるより、どこかで見てもらうのを探すほうが力になるんだって」

振り返る。自分とそう変わらない、子供のような、

「あなたも探させてやったら？」

思い知らされる笑顔だった。

いささか強引に夏樹を連れ出した葵は、彼女をそのまま明口のスタンドまでつれてくると、制服姿の女子生徒たちの一団からわずかに外れた席に腰掛けた。

「とりあえず、ジュースでもどう？ ペットボトルでよければ」

「……いただきます」

差し出されたレモンティーのペットボトルを受け取る。視線をどこに向ければいいのかわからず、夏樹はずっとペットボトルのキャップに印字されたメーカー印を睨みつけていた。

「そんな顔じゃないで。中国産じゃないから」

「そういうのは気にしませんから。毒なんてそうそう入ってませんよ」

「そうそうでなくても入ってるもんじゃないわよ。そんなことより、話したいことでもあるんじゃないの？」

「……誘ってきたのは、橘さんじゃないですか」

「理由もなく、ほいほいついてきたわけじゃないでしょう？」

その言い方はどうかと思っただが、反論しようにも言葉が思い浮かばず、ペットボトルを握る手に力を込めた。

試合開始を合図するサイレンが響く。バッターボックスに明口の先頭バッターが入り、最前列に陣取った応援団が歓声を振るつた。

席を立とうとする夏樹の手首を、葵が押さえて席に座らせた。

「……止めたのは橘さんですよ？」

「きたばかりで帰ることないじゃない。試合は二時間もあるんだし、ゆっくり話しましょうよ」

「コールド負けすれば、早く終わりますよ」

「そうはならないから、時間はたっぷりあるわ」

胸がちり、と痛んだ。

自信満々に言い切る葵の目には、疑いのような彼への信頼が感じられて、夏樹は穏やかでない思いでそれを見返した。

「橘さん、北村さんの彼女なんじゃないんですか？」

「そうよ。でもあのヘタレが野球上手いのも知ってるからね」

「あの、さつきからヘタレって」

「ああ、今マウンドに立ってるあいつよ」

言って、葵はグラウンドを指差した。

視線でその行方を追う。

二人の視線の先、雪乃華のベンチを一瞥した竹井直樹は、マウンドの上でゆつくりと腕を振り上げたところだった。

遠い昔を、彼女は思い返す。

竹井直樹は幼稚園から小学校に入ったばかりの頃、ただ本が好きだけの小さな子供だった。なにをするにも万事遅れていて、休み時間に校庭に出ることもせずに図書館にこもっていた。勉強は人並みに出来る方だったが、かといって秀才といえるほどでもなく、クラスでもほとんど印象に残らないような子供だった。

それは彼が野球を始めるようになってからも変わることはなく、図書館でおとなしくしていた少年が、昼休みの読書の場を教室に移しただけで、一見して、彼に何かしらの才能があるようには、誰にも見えなかった。だが、そんな彼がひとたびマウンドに立つと、時として相手を手玉に取る悪魔に、時として真つ向から戦いを挑む戦士へと豹変し、他のスポーツではレギュラーを張るようなクラスの仲間達をいように玩ぶのだ。

かといって、それで彼がスポーツに目覚めるということは決してなく、相変わらず他のスポーツをやらせれば万事に遅れた運動音痴のままだった。

サッカーをやらせればドリブルしているボールに転んだし、バスケをやらせればシュートボールはリングのはるか手前で頭をたれた。

そんな彼が、なぜ野球に関してだけは他のスポーツが得意なクラスメイト達でも及びもつかないほど豹変するのか、未だに不思議ではないが、それはもう天賦の才としか表現しようのないものだった。

一方の北村俊哉は、直樹とは正反対にスポーツ万能の少年だった。

直樹が野球にだけ天才であるのだとしたら、彼は運動そのものへの天才であったといつてよかった。何をやらせても人より出来たし、スポーツでも格闘技でも、彼が人に劣っているところなど、葵は一度も見た事がなかった。

自分自身の才能を自覚していたし、それを吹聴することによって降りかかるプレッシャーも乗り越えることが出来る男だった。そんな彼のことだから、野球を始めたときも、直樹に勝つことなど、そう難しく考えていなかっただろう。

だが、そうはならなかった。

白球が放たれる。

指先にかかるかすかな感触。稼動する右腕。始動から制止まで至る身体の動き。音が消えた白い世界で、自分の身体の隅々までが知覚される。

全ての意識がミットに注がれた。

自分とキャッチャーとの間を通る、透明なレールの中をボールが通っていく。そのコースを走っている限り、たとえ相手がメジャーリーガーだろうと、打たれる気はしない。

最初のバッターを三振に切り、二人目のバッターをカーブで打ち取った。

ここまでは、試合を思い通りにコントロールできていた。

コントロール無視の全力投球で意表をついた前半二回。下位打線を力技で抑え込んだ三回は、それまでの自分の投球スタイルを崩した奇襲だった。

名門・明口学園を相手に、いかに直樹といえども、試合を九回通して真つ当に勝負して勝つ自信はなかった。

最初の三回を奇襲で消化し、一試合を九回ではなく六回で乗り切ろうというさもしい作戦だったが、明らかな実力差が却つてこの作戦を容易にしていた。

明口は春に甲子園を制した、名実ともに日本一の高校だ。だが、その内実はあくまで直樹たちと同じ高校生に過ぎない。

圧倒的な実力差におぼれることもあれば、余裕から生まれた油断に足をすくわれることもある。いつでも手が届くと思つている相手故に、手を緩めてしまうこともありえるだろう。

初球から積極的に攻めてくる相手からは、威圧よりも緩みが感じられた。

そんな相手に全力で意識を集中して、辛うじてかわしているだけの自分が情けなかった。だが、それが本来の実力差なのだ。にもかかわらず、日本一を相手にして、結果的に同点のまま三分の一を終了させた。出来すぎた結果だ。

前回の試合で戦つた、平野の涙が思い出された。

あいつはきつと、俺のことをこの先一生怨んでいくに違いない。それは直樹と平野だけに限ったことではない。敗者と勝者の間に横たわるそれは、戦いを終わらされた全ての選手達に同種の感

情を抱かせる。

高校野球は美しくなどない。

なぜなら――

マウンドの土を足でならず。三人目のバッターがバットを振りながらボックスに入り、思い出したように審判に一礼した。

相手の目付きから、今まではすでに違うことを思わされた。

――十一人か。思つたよりは誤魔化した方かな。

さすがに日本一のクリーンナップともなると、精神的な熟練度が違う。おそらく、彼のバッティングを見た後の敵ナインはこれまでどおりとはいかなくなるだろう。

直樹は背筋を伸ばしながら、バックボードに目をやった。

赤いランプが二つ。

もう何度も見てきた光景だった。ここから取るたつた一つのアウトに、どれほど苦労させられてきたことが。

深呼吸を一つ。嘆息が混じった。

相手を睨みすえ、構える。

外角すれすれに入ってきたボールは、すつと外に流れて、轟音を立てて振るわれたバットの下を潜り抜けた。

風が頬を叩いた。切り裂くようなスイングに、浮いた汗が冷たくなる。

「ストライク！」

主審がコールした。

その時、バットをベースに突き立てるように叩きつけ、自分を

睨みつけてくる相手が、去年の河川敷の試合で対戦した二軍メンバリーの一人だとはじめて気がついた。

そういえば、こいつは最初の打席からずいぶんと緊張していたな。

直樹はそのことを、単にホームランでも打とうとしているのだと思っていたが、実際には俊哉と同種のプライドの問題だったのだ。

「こういうヤツに遊び玉を投げるのは失礼だよな」

内角高めのコース。ボールは腕を折りたたんで流し打とうとした相手のさらに内側に挟りこんだ。

思い通りに打たれたボールがフェアラインを超えてフェンスに突き刺さる。

デッドボールまがいのボールに喰らいつこうとして、慌てて状態を崩したバッターの身体が倒れた。

ファール。カウント二一〇。

怒りに満ちた目で自分を睨みあげてくる。その感情を、直樹は冷然と受け止めた。

なぜなら——これが高校野球の本来の姿だからだ。

ここでは何も生まれない。

トーナメントという戦いを潜り抜け、生まれてくるものはたった一人の勝者と、それ以外の敗者だ。

生まれてくる勝者は次の敗者にすぎない。

敗者は敗者の屍を乗り越えて、一つ先の敗者へとなる。誰もが

心の底から勝者になれるとは思いい切れないまま、その覚悟を持ってさえ、新たな敗者にしかなりえない戦い。

目の前の彼らは三ヶ月間、その全てを乗り越えたのだ。

「そんな目で見るなよ。おまえらは見られる側だろうが」

自分たちは、そこまでいくことは出来ないだろう。そう思ってしまうこと自体が、すでに勝者になる資格を失っている証明みたいなものだった。

「おまえみたいなやつが、そっちには何人いるんだ？」

闘争心の表れだろう。直前の内角に臆することなく、さらに内側に立つバッターからは、逃げることを許さないという気概が見て取れた。

「心配するな。今日だけだ」

日本一のおまえ達が、俺みたいなゴロツキを相手にしなきゃならないのは。だから、もう少し愛想笑いで付き合えよ。

相手の狙いが、外角を装った内角であることはわかりきっていた。その上で、山田に出したサインに、答えたのは、相手の気概に打たれたからではなく、全力の相手を押さえ込むことで、相手にこれまでとは違うということを分からせたかった。

コースは先ほどより、横に甘く、縦に厳しく。

バットを立てるようなスイングが、救い上げるように襲い掛かった。

コースがもう少し高ければ、ボールはライトスタンドまで飛んでいったかもしれない。だが、ボールは回転を抑えて落としたの

だ。当たるはずがなかった。

体を前のめりに倒しながら、バットを前に出し、ボールを辛うじてすくい上げる。

真上に飛び上がったボールの行方を見るまでもなく、それが上手いかないことはわかっていただろう。それでもバッターはエラーを期待して、全力で一塁まで駆けっていく。

直樹はその場から一步も動かさず、頭に落ちて来るボールをグラブで取った。

主審がアウトとチェンジを宣告し、マウンドの主役が交代する。ベンチから北村俊哉が駆け寄ってきた。

掲げるグラブにボールをトスしてやり、入れ替わりでマウンドを降りようとしたところで、背中に声をかけられた。

「ようやく本腰入れてきたな。三流速球派の真似事は止めたのか？」

「一流になれるなら続けたかったけどな」

「てめえにや無理だ」

「知ってるよ、このクソツタレめ。だから俺も」

そういえばと、昨日はずいぶんと憂さ晴らしで好き勝手言ってくれたものだと思い出し、もう八年も黙っていた思いを口にした。「てめえのことが、大嫌いなんだよ」

北村俊哉にとつて、自身が天才であること、それを証明することは宿命だった。

彼は幼い頃から、スポーツは万事に優れていて、それによって集まる期待に応え続けた少年だった。

何をやらせても人並み以上に優れていたし、たいして練習することなく、身体やボールを思い通りに操ることの出来る才能が彼にはあった。同い年の子供達から向けられる羨望の眼差しに応えることは苦ではなかったし、それを達成した時の快感は何にも代えがたい喜びがあった。

その喜びが、重圧になったのは果たしていつからだったのか。

きっかけは、些細なことだった。

子供の頃の純粋な恋心。はじめて好きになった子が、野球部のエースに夢中だという話を聞いて、それを台無しにしてやりたくなった。

そんなバカげたことで始めた野球だった。

マウンドの土を踏みつける。

手の中でボールを弾ませ、深呼吸を一つ。相手にはまだフォアボールを一つ与えただけだったが、すでにランナー出塁を許してしまっているだけで、負けている気分になる。

試合結果さえよければいいのだから、と納得しようとしても、どうしてもできない子供染みた嫉妬がある。

このこだわりを、いったいつになったら捨てることができるのか。

「決まってるよな」

この試合に勝つことだ。それこそが、何よりもこの焼きつくような思いから解放される、唯一の手段なのだ。

日本一になどなれなくてもいい。次の敗者になることが出来るなら、それ以上に、今の自分に何の価値があるというのだろう。

はじめて争った試合のことを、今でも思い出すことがある。

いや、思い出すなどという感傷的なことではない。あの日、はじめて完膚なきまでに叩きのめされた日の記憶は、今でも人生の歴史として、俊哉の中で深く刻まれているのだから。

河川敷のグラウンド。八年前の、今日と同じような夏だった。

五年生から入ったクラブで、すぐにエースで四番の座に着いた俊哉は、目的であった直樹との試合のマウンドに立った。

自信はあった。そもそも相手が学校では休み時間に教室にもって本ばかり読んでいるような、運動音痴なのだ。そんなのがエースを張れるクラブなどいたいしたことないと思っていたし、自分の才能への自信もあった。

負ける要素など何もなかったし、すぐにつく決着はずだった。だが、そうはならなかった。

来るボールはことごとくバットをすり抜けていった。思い通りのコースに来たと思った次の瞬間には、ボールはバットの下をくぐって消える。かと思えば、その次のボールは、渾身のスイングのはるか上を我が物顔で通り過ぎていくのだ。

それまで自分が考えていた野球へのイメージが、ことごとく覆

されていくようだった。そんなボールを投げるのは、クラブでは監督でもコーチでも出来ないことで、直樹の所属するチームが県内でダントツの強さを誇る名門だと知らされたのは、その試合で完敗し、その年最初の大会が近づいてすぐのことだった。

結局、小学校の二年間と中学の二年間を合わせた四年間、野球を始めてから今日に到るまでの八年もの間、俊哉は直樹に一度も勝つことが出来ないままだ。

剛球が空気の壁を貫いて、ど真ん中に構えたミットに飛び込んでいく。

球場全体に本物の速球派がどういふものかを感じ知らせるような、自身と相手の格の違いを知らしめるような球だった。

三人を立て続けに高め速球のみで三振に切り捨て、四回の守りを早々に終わらせてしまった。

今夏ただ一人の甲子園優勝投手が魅せた、地方大会らしからぬ鬼気迫る投球に球場はざわつき、ボードで二列に並ぶ八つのゼロに、ようやく違和感を覚え始めた。

「やっとはじまった」

となりでレモンティーのペットボトルを飲みながら、それまで黙って試合を観戦していた葵が呟いた。

「はじまった？」

「試合よ。いままでどっちも狸の化かし合いみたいな真似してた

のに、ようやく試合らしくなってきた」

「いま〇対〇ですけど、どっちに有利になりますか？」

「有利不利に動くなら、実力差でどうあってもこっちよ。そちらさんとは格が違うもの」

唇を噛んで抗議しつつも、やはり戦力差への自覚はあるのだろう。夏樹は黙って先を待った。

「あのヘタレは、全ての回を全力で勝負しようとしたら、途中どこかでガス欠になると思ったのよ。実際、あいつにとって一番怖いのは肘に負担がかかる長期戦だからね。だから、前半三回をさっさと終わらせるような投げ方をしたの」

「……どうやって？」

「うちが大好きな『そこそこ速い三流速球派』をやるのよ。コントロールが甘くて、普通よりもそこそこ速い程度の、田舎で小山の大将やってそうなピッチャー。うちの連中は、そういうのが大好物だから」

好相性のピッチャーだから、簡単に手を出す。コントロールもそこそこいいから、狙い玉も絞りやすい。だから、お望みのコースにボールがきたら、我慢が効かなくなってしまう。

実際には、それはコントロールされた変化球で、要所で芯を外されているのだから、アウトを取られるのは当然だ。

「耐球策に出られると、まずいからね。さっさと打つてもらわないと困るんだよ。あのヘタレは」

「橘さん」

「ん？ なに？」

「その、先輩のこと、ヘタレって言うの、止めてくれませんか」

「名前で呼んでほしいの？」

「……」

「睨まないでよ。いいじゃない。ちょっとからかうくらい」

「私はどっちもよくないです」

ムキになって突っかかってくる態度が面白くて、つい苦笑してしまう。

からかわれたと思い夏樹はさらに顔を険しくした。

「馬鹿にしてませんか？」

「ううん？ かわいいからからかいたくなるだけ」

やはり馬鹿にされているのかと思うような返され方だが、夏樹はもう気にするのは止めることにした。どうも年上とは相性が悪いようだ。

「それじゃあ、今のところは先輩の思い通りに試合が展開されていると言うことですか？」

「そうね。まあ、だから実際に耐球策に出られたらまずいんだけど、こっちはそれは出来ないし」

「できない？ どうしてですか？」

「ここが今何回戦だと思う？ 耐球策に出ると、多少の悪球にも手を出さなきゃならなくなるのよ。でも、そうするとせっかくのバッティングフォームが崩れかねない。こんな大会の序盤で、そんな目先の勝利を優先したりしないわ」

もちろん、このまま打ちあぐねる展開が終盤まで続くようなら話は別だろうが、そんなことはわざわざ言わなければならぬ道理もない。それに、夏樹は彼女の言葉をそのまま素直に受け入れているようだ。

——高校野球は、美しくなんか無い。

かつて好きになった男と、今好きでいる男の言った言葉。お互いを嫌いだといがみ合っているはずの彼らは、ひよつとしたら、根底で似ているのではないかと、最近、葵はよく思うようになった。昔は、対照的なあり方が不仲の原因だと思っていたが、実は彼らの間にあったのは、同族嫌悪なのではないだろうか？

竹井直樹がピッチャーとしてしか自身のプライドを保てなかったのと同じように、北村俊哉もまた、天才としての自分を証明し続けることによってしか、在り方を証明できなかったのではなかったのか。

——野球なんか出来なくていい。

かつて、二人はそれぞれの時期に、その言葉を口にした。

一人は投手というポジションへのこだわりから、もう一人は何でも出来るという強い自尊心から。

だとするならば、北村俊哉が竹井直樹に勝てなかったのは、自らの場所への想いの強さから故だったのか。

北村俊哉にとつて、自分がピッチャーであるということは、と

ても重要なものだったに違いない。だが、

竹井直樹にとつては、それこそが彼の全てだったのだ。

「あたしの隙間なんて、あるはずなかったのか」

「え？」

「あなたは頑張りなさいよ、つて話」

「……？」

夏樹は言葉の真意を掴みかねて首を傾げる。

葵はそれ以上話すことはないとも言うように、視線をグラウンドにもどした。

試合はまだ、中盤に差し掛かったばかりだった。

四回の裏の攻防は二つの三振、一つの内野フライと、あっけなく終了し、五回の攻防も俊哉はフォアボールを、直樹は明口に二つのヒットを許したものの、互いに無失点に抑え、辛うじて〇対〇を維持。

徐々に均衡は崩れ始めていたが、両校ともに決定打をもてないまま、試合はいよいよ後半戦に差し掛かった。

そして、誰もが明口へと流れが傾いてきたことを感じ始めた六回の裏、それは起こった。

ワンアウトランナーなしから、雪乃華の先頭打者、中村がフォアボールで出塁。続く二番の藤岡にまさかのデッドボール。

これで一死一、二塁。そして三番、前の青桐戦でさよならホームランを打った山田がバッターボックスに入った。

選択肢としては、ここで山田を歩かせて一死満塁にするという手段もあるはずだった。今日の試合で山田が三番に座っているのは、打順を少しでも多く回すための作戦であり、四番打者は彼より格下であることが明らかだったからだ。

だが、日本一のプライドがそれを許さない。それ以前に、そもそも逃げるという選択肢など浮かばなかったのかもしれないが。球場は確信に満ちた思いで対決を見守る。

そして投げられた初球。高めに浮いた速球に、山田の豪打が火を噴いた。

打球は内野の頭を越えて深い守備をしていた外野の前に落ち、二塁ランナーの中村は迷わず三塁を廻る。だが、ライトはすでに返球体勢に入っていた。

送球が一直線にキャッチャーへと返ってくる。ワンバウンドで返球はミットに収まった。

ランナーの中村はまだホームベースの手前だった。キャッチャーは脇を締めて重心を落とす。誰もが本塁死を覚悟した。しかし、中村は前進を止めなかった。

重心を落とし、ミットの下にもぐりこむように膝を沈め、肩を入れる。その後ろでは、藤岡が迷いなく駆けってくる。

双方のスタンドが総立ちした。中村の狙いは明らかだった。だが、彼は本来ピッチャーであり、雪乃華投手陣の台所事情を考ええた場合、その作戦は絶対にありえないはずだった。だが、アウトが確実視されている本塁に躊躇なく突進する中村と、その後ろか

ら追走する藤岡という状況からは、他の作戦は考えられなかった。全力疾走する中村が、肩からキャッチャーに突進する。

まるで球場が爆発したかのような歓声が響いた。

怒号の渦がグラウンドで巻き起こり、そのなかで、巨漢の明口のキャッチャーの身体が浮いた。転がりながら本塁ベースを駆け抜ける中村。だが、体勢を崩しながらも意地の踏ん張りをみせるキャッチャーは、片足で全体重を支えていた。

藤岡は迷わなかった。

浮いた身体。空いた片足。そこに、低空を這うようなスライディングで飛びこむ。指先が、ホームベースに触れた。

審判の両腕が、大きく横に開かれる。

カバーに入っていた俊哉がキャッチャーからボールを奪うように掴み取り、抜け目なく三塁へ送球。二塁を廻ろうとしていた山田の足を止めた。

六回裏、ついに均衡が破られた。

先取点は、雪乃華。

「ふうん。ずいぶん頑張るじゃない」

絶望感に打ちひしがれるスタンドの中で、相変わらず落ち着いている様子で、葵はペットボトルに口をつけた。

「余裕ですけど、ここきて先取点を奪われたのは痛いんじゃないですか？」

「痛いっちゃ痛いけど、それはそっちも同じでしょ？ 本塁突入

した二年の子、肩抑えてるわよ」

葵が指差した先では、藤岡に肩を抱かれてベンチに引き上げていく、中村の姿があった。

「中村くん……」

「控えのピッチャーがいなくせに、あんな無茶するなんて。分
からなくもないけどね」

たしかに、中村の突進がなければ、いくら藤岡の芸術的スライ
ディングをもってしても得点にはならなかつただろう。だが、そ
の代償としてこれはどれほどの対価となるのか。

「大丈夫ですよ」

不安におびえる内心を押し隠すように、夏樹は呟いた。

「先輩なら、大丈夫です」

「奇遇ね。わたしもそう思ってるのよ」

「……え？」

「俊哉なら、これぐらいの不安、すぐに打ち消してくれるはずだっ
て」

その時、夏樹ははじめてペットボトルを握る葵の手が震えてい
るのに気がついた。

彼女も不安なのだ。ただ、恋人への信頼感がそれを押さえ込ん
でいる。

なら自分も信じよう。

覚悟を決めるように深呼吸をして、マウンドで肩を廻す北村俊
哉を睨みつけた。

その効果はまったくなく、俊哉は最後の打者を三球でさっさと
切つて捨てたが、夏樹にそれまでと違う覚悟で試合を追おうと決
めさせるのに十分なものだった。

席を立つ。となりの葵が訝しげな目を向けてきた。

「どうしたの？」

「向こうで応援します。わたし、こう見えて雪乃華のマネージャー
ですから」

「そう」

口笛でも吹きそうな満面の笑みで頷かれた。

「なら、もう帰りなさい。あなたの居場所は決まっただんでしょ」

「はい！」

言つて、夏樹は通路の階段を駆け上がる。ここから雪乃華の応
援席に移るには、一度球場を出て外を廻るしかない。

人波を掻き分けて階段を下りようと、入り口に差し掛かると
ここで、背中に声を掛けられた。

「黒沢さ〜ん。あなた私はまだヘタレに惚れてんじゃないかとか
心配してるかもしれないけど〜！ 私今はもう俊哉に夢中であんな
ヘタレどうでもいいから〜！ あなたも頑張りなさいね〜！」

顔が爆発したかと思つた。

「いい話と悪い話がある。どっちから聞きたい？」

投球練習を終えてマウンドに上がつてきた山田は、まるでこの
世の全ての苦惱を貼り付けたような顔をしていた。

「……いい話から頼む」

「信じられない話だが、あと三回をゼロに抑えれば、俺たちは日本一の高校に勝利することが出来る」

「そりゃいい話だ。……わざわざありがとよ。悪い話はなんだ？」

「さっきの本塁突入で、中村が肩を痛めた。ファーストは岡田と交代だ」

つまり、控えのピッチャーはもういないということだろうか。

「なるほど。それもすばらしい話だな。クソツタレ」

「頑張れるか？」

「頑張らなきゃ、話にならないだろ。なんとかするさ」

「肘、痛んでるんじゃないのか？」

「ああ、そりゃもう大丈夫だ」

ひらひらと手を振って、心配するなとかえしてやる。

それで安心できるような単純な男でもないだろうが、これ以上どうしようもないベンチの事情があつてか、苦しそうな顔で頭を下げてきた。

「やめろよ。試合で負けても、俺は頭を下げてやらんぞ」

「そんなことしないでいいんだ。俺は、本当に」

「気色悪い。それ以上言われると、歯も球も浮いちまうぞ」

強引に話を打ち切って、直樹は山田のケツを蹴っ飛ばしてマウンドから落とした。

山田はまだ何かを言いたそうだったが、それを飲み込んでとぼとぼと戻っていった。

山田の心配は、半分当たっていた。だが、それは最初から覚悟していたことだ。

違和感は最初からあつた。序盤、相手の目を欺く為に多少無茶な投球をしたのがきっかけになつたのだろう。

五回の守りを切り抜けたときには、すでに腕の中で、何かが張って割れるような音がしていたし、六回を切り抜けたときには、すでに痛みが腕を駆け上がって脳髄にまで到っていた。らしくもなくコントロールが乱れてフォアボールを出してしまったが、○点に抑えられたのは僥倖だった。

あと三回。もう後ろがいないのだから、頑張れるかどうかは、この際問題ではない。やるしかないのだ。

それに、肘の痛みが大丈夫だというのは、まんざら嘘でもなかった。

もう感覚自体が消えうせているのだから、痛みが残っているなどという贅沢なことは、言えるはずもなかった。

火の出るような当たりが、頭上を越えてセンター前に突き刺さる。

前進守備をしていたセンターが前のめりになりながらもワンバウンドで捕球してくれたおかげで、ランナーは一塁で足を止めた。甘いコースではなかったのに、力で持っていかれた。

右腕がゴムのようだった。神経もなにも通っていない絶縁体の塊が肩から垂れ下がっている。

指先の細かい操作が出来ない。腕に頼って投げていては どうにもならないと悟り、全身の運動にさらに意識を沈めていく。

外角低目をついたはずのボールが、真ん中高めに浮いた。絶好球のボール。

ホームランにならなかったのは、バントに構えていたバッターが、警戒してバットを引いてくれたからに他ならない。

「……情けねえ」

大丈夫だと大口叩いておきながら、早々にこのザマだ。いったいなにがどう大丈夫だというのか。

こんなピンチは慣れっこのはずだった。だが、意識を内側に沈めることも出来なかった。もはやどうしようもない。

打つ手がない。

もはや打たれる覚悟でデタラメなボールを投げつけてやろうかと、山田のミットを睨みつけ、

瞬間、意識の全てが瓦解した。

蒼穹が鉛色に染まり、視界の全てが灰色のフィルターにかけられる。

息を呑む。耳朶に、従兄の言葉がよみがえった。

——ど真ん中に向かって投げてみる。

思い出すのは、十年前の冬的一幕。

——何も考えなくていいさ。気持ちだけぶつけてこい。

朦朧とした意識が、真夏の陽炎の奥、ゆらいだ白昼夢を見せられる。

グラウンドが消えた。

観客が消える。

雪で覆われた田園。

コンクリートの道路。

ミットを構えた、自分に野球を教えてくれた、従兄の姿。

初めての投球を思い出す。

記憶の中に、いつかブラウン管の中に見た、ピッチャーの姿を思い描きながら……

白球が放たれる。

空気を切り裂いて抉りこんだ内角から、シュートボールはさらにその内側に切り込んだ。

バットの根元に食いついたボールが頭上を越え、ショートの手前にバウンドする。

6—4—3のダブルプレー。

球場がざわついていた。その喧騒も、夏の陽光も、次の打席に入った打者の姿さえも、直樹の意識の外だった。

意識が自分の中に潜っていく。遠い昔に思い描き、そして体現してきた理想のフォームを追求する。

初球のストレートを見送られ、二球目の内角をファールにされた。

三球目の外角はファールに粘られ、四球目のシンカーは再び見送られ、ボール。

五球目はボールを切つてスタンドに飛び込み、六球目は真後ろのフェンスに突き刺さる。

感覚はほとんどないままだった。

グチグチと痛みを訴える、軟弱な肘を無視した。

疲労でへばりそうになる身体を叱咤した。

震える指先に櫛を飛ばし、上がらない肩を引きずつて廻した。

全ての意識がミットに向かい、迎えた七球目。

——何も考えなくていい。ただ、気持ちに乗せて。

ど真ん中に、素直に入つていったストレートが、危険な音を立てて打ち返される。

自分に向かつて一直線に襲い来るそれは、直樹はとっさに出した左のミットの中に飛び込んできた。

黒沢夏樹が雪乃華にスタンドに駆けつけたとき、バックボードに刻まれた数字は、先ほどより○を一つ足した状態だった。

スタンドは彼女の想像以上のどよめきに包まれている。だがその中には、決して純粹な喜びだけではないことを読み取ってしまった。

彼らの中には雪乃華の目前の勝利に悦ぶものと、地元民として日本一の高校がこんなところで姿を消しているのかという、二つの複雑な感情に板ばさみにあっているのだ。

そんなことは知ったことではない。

夏樹はバックボードに改めて目をやった。

黄色のランプが二つ。緑が一つ。赤いランプは、まだ点灯していなかった。

全速力で駆けつけた甲斐があった。膝に手をつけて、乱れる息をなんとか整えようとする。

視線をグラウンドに向ければ、竹井直樹は先ほどよりも、いつも深く帽子をかぶりなおしているところだった。

ランナーはいない。直樹はバッターに向き合い、構えた。

高めに浮いた球がいく。緑のランプがさらに一つ点灯。

さらに続けざま、速いテンポでボールが投げ込まれた。

かん高い金属音。回転がかかったボールが、フェンスを乗り越えて夏樹目掛けて飛んできた。

「……ふえ!？」

とっさに身を翻し、脳天目掛けて落ちてきたボールを避ける。

跳ね上がったボールが昇降口に飛び込み、階段を飛び越えて通路に落ちた。その跳ね返り方を見るに、あやうくたんこぶではすまない怪我をするところだった。

安堵のため息をつく。

バックボードに点灯するライトに変化はない。

マウンドの直樹は、審判から受け取った新しいボールを指に馴染ませていた。こつちのことなど、まるで気付いていない風だ。

それが少しだけ残念で、胸のうちで少しだけ悪態をついた。

ファールを打たれたばかりの直樹が、次の瞬間見違えるような快速球で三振を取ったのがいつそう腹立たしくさせた。

それでも、マウンドで嬉しそうにガッツポーズをする彼を見ると、やはり自分も嬉しい気持ちになってしまう。

黄色と緑のランプが消え、赤いランプが一つ点灯した。

試合はついに、終盤最初の一步を踏み出した。

攻守が入れ替わり、ゆっくりとした足取りでマウンドにあがる北村俊哉の前に、バックボードに刻まれた数字が、非情な現実を突きつけてくる。

八回裏。最後になるかもしれないマウンドに立ちながら、北村俊哉は驚くほど冷静な気持ちでそれを見上げている自分に気付いた。

これと同じ光景を、今まで何度も見てきた。

竹井直樹と対戦した時、自分はいつだってこんな立場だった。

それでも、これまでと違う気持ちでそれを見上げることが出来る自分がある。それがここに来るまでに潜り抜けてきた修羅場のためか、今までにない予感が自分を安心させているのかは分からなかった。

あの頃。自分は独りでなんだって出来るつもりでいた。やることなすことが思い通りに出来たし、自分よりずっと長くそのスポーツをやっている者に対しても、決して臆することなどなかった。

自分に与えられた才能に絶対の自信を持っていたし、それに付随する周囲の期待に応えることに、快感さえ覚えていた。

竹井直樹は、そんな怖いもの知らずだった自分を、はじめてぶち壊した存在だった。

小さい頃のあいつは、万事に劣っていて、ただ教室の隅で一人で本を読んでいるような、どこにでもいるさえないヤツだった。

それなのに、あいつはマウンドに登った瞬間、なぜか別人に変身してしまうのだ。

大胆にストリートをど真ん中にぶち込んできたかと思えば、繊細に変化球をコーナーに決めてくる。小学校の頃は変化球が認められていなかったから、ほとんど目立たなかった自分達の差は、中学になると、所属の学校の地力の違いもあって、あっさりと露見した。

変化球もコントロールも、投球術でも俊哉は直樹に遠く及ばなかった。だから、唯一のアドバンテージである速球を必死になつて磨いたのだ。

直樹が俊哉の速球に嫉妬の念を送っていたように、俊哉もまた直樹のピッチャーとしての完成度の高さに、羨望の眼差しを向けていた。

そんなことはお互いに思いもよらないことだったが、結局のところ、彼らはお互いに分かり合っていたのだらう。だからこそ、決して相容れることが出来ないのだ。

今だって、それは変わっていない。これから先も、彼は直樹を

正面から認めることはないだろう。

だけど、今の自分は、もうあの頃までの自分じゃない。

一本指を突き上げ、仲間達と声を出す。

まだ試合は途中だ。しかも負けている。それでも、どうしても感傷があった。

ここに来るまでの、二年半という月日を思い返す。

早朝のトレーニング。球が見えなくなる日没まで続けられた練習。夜の体育館でのマシーン打ち。

日本中のどの学校にもひけをとらない練習をしてきた自負がある。それが日本一になったプレッシャーに負けない、明口ナインの力の源。自信と誇りだった。

そしてここに今立っている自分が、決して一人の力によるものではないことを、今の俊哉は知っている。

足を痛めていた時期。特待生で入りながら野球をしていない自分に、学校中が向けてきた憐憫と嘲りの視線。

耐え切れずに野球を投げ出した。もうどうでもいいとヤケにもなった。そうなっても、自分を信じてくれた橘葵と、遠くから見守ってくれていた、今のチームメイトたちに、言葉では言い表せない感謝の気持ちがあった。

彼らの期待に応えたい。かつての自分を乗り越える為に。そして……

そして、自分を立ち直らせる最大のきっかけを与えてくれた、竹井直樹。

思えば、自分は野球を始めたときから、これ以上ないライバルに恵まれていたのかもしれない。

放たれたボールは、思い通りのコースをなぞり、キャッチャーの構えたミットの中に飛び込んだ。

彼がいなければ、今これほどの制球力を手に入れられるほど、練習に腐心できただろうか。自分は確かに、竹井直樹の幻影に怯えてきた。だが、それが今の自分をこの高みに、慢心することなく引き上げてくれたものであることも疑っていなかった。

その恐怖も今日超える。

立て続けに二球。渾身のストロートを投げ込んだ。

審判がアウトを宣告し、バッターがボックスから姿を消す。

続く二人目のバッターをカーブで内野ゴロに打ち取り、三人目をストロートの三球で切り捨てた。

その間、万が一にも打球を逃すまいと、かけらも気を緩めようとしなないナインの気持ちが背中に伝わってきた。

——高校野球は、美しくなんか無い。

かつて橘葵に言ったその言葉を、取り下げるつもりはない。ここには確かに、美しいだけでは片付けられない出来事もある。試合に出る為に仲間達を蹴落とし、試合に勝つために相手校を蹴散らし、そのたびに流し流された嗚咽を、ただ青春の輝きだと美化することは出来ない。

だがそれでも。

マウンドを駆け下りる。

その背を叩く仲間達の手が、かけられる声、自分に諦めるなと言っていた。

スタンドに詰め掛けた、関係者やファンの声援が、自分達を勇気付けてくれた。

俺達は負けない。

俊哉の胸の中で、その予感が今、確信へと変わった。

言葉を取り下げるつもりはない。だがそれでも、

——ここはやはり、何よりも代えがたい。

竹井直樹は、試合前になんとなく覚えていた予感を、いまや確信として抱いていた。

腕によみがえる、鋭い痛み。右腕の先から昇ったそれは、肘、肩を伝って脳髄にまで響いてくる。

黒板を引っかくような音が頭蓋骨の中でこだましていた。

それでも、まだ降りるわけにはいかなかった。

バッテリーボックスには、北村俊哉がいる。これが自分達の八年間に終止符を打つ打席なのだ。

ならば、最後まで、背中を見せずに向き合わなければならぬいだろう。

彼が勝ちたいと手を伸ばし追い続け、その実逃げ続けてきただけの背中を、今こそ翻さなければならぬ。

それに、まだ自分は見せきつていない。

叶えたい約束があった。ここに来る前、ほんの先日交わしたばかりの誓いが。

黒沢夏樹がこの球場に来ていることに、直樹は気付いていた。

先ほどのファールボールの行方を追ったとき。

立ったまま試合を見届けている黒沢夏樹が目に入った。

ほんの偶然だった。だけど一瞬で彼女だと分かった。

その瞬間、せつかく沈み込めていた意識が一瞬でわきあがった

ことに、我ながらゲンキンだと笑いが漏れた。

本当、おかしな話だ。

野球の最中に、ほかの事を考えたことなどなかったのに。

帽子を目深にかぶり直し、指先でつばを叩いた。

意識を中に沈めていく。だが、納まらない。

この一年の記憶が、溢れ出してきて止まらなかった。

きつと、この打席が最後だろう。投げられるか、そうでないかの問題ではなく、この打席が過ぎたら、もう今までの自分では

られない。

アウト二つ。一塁のランナーは無視することに決めていた。牽

制球を投げる余裕もない。

だから、見るのはただ目の前だけ。

パンパンに膨れた意識を、何とか中に沈めこむ。

背筋を伸ばし、相手に向けて構えた直樹の脳裏に、従兄の声が

そつとささやいた。

——なあ、直樹。野球、楽しかったら？

直樹はその問いに、心の中でこう答えてから、気持ちよく右腕を振りぬいた。

「悪くなかったよ。アニキ」

澄んだ音が響く。真夏の蒼穹に、打ち上げられた白球が吸い込まれた。

すべての歓声が止み、その思いが、気持ちちが、すべてその存在に集められた。

沈み込んでいた意識が膨れ上がる。

マウンドに立ち尽くしたままの直樹は、静かな気持ちでバックボードに振り返った。

視界の中に色が帰り、陽炎の揺らめきの奥で、十年前の冬が射光に消し飛ばされる。

逆光の中に消えていくボールに、そっと目を閉じた。

心の中で、何かはがれていくのを感じながら、直樹はその行方を歓声の中に聞いていた。

何もかもが許されていくような、そんな空の色だった。

人気のない学校の屋上から見上げる空は底抜けの蒼に染まっただけで、それは海から運ばれてくるかわいた潮騒もあいまって、どうしようもなく胸のすく思いにかられる。

まったくいい加減な季節だと、直樹は苦笑した。

ワイシャツの襟元で顔を仰ぎながら、ゆつくりと空の匂いを胸いっぱい吸い込む。

夏休みに入った学校には人の気配は感じられず、無人のグラウンドでは風に吹かれたかすかな砂塵が舞った。

降り注ぐ陽光に目を細め、耳元に置いた携帯電話の雑音に耳を澄ませます。

いったいどれほど眠っていたのか、それを確認するのは携帯のワンセグを終わらせれば済むはずだったが、そうする気にはならず、ひとつ大きく伸びをして、その場で半身を起こした。

屋上の扉が開く音がして、振り返る。

私服姿の山田が、ふらふらと携帯電話のアンテナの先を摘まんでいた。

「今八回が終わったところで、三対一だ」

その数字の意味は聞き返すまでもなかった。

今頃野球部の部室には、一人で試合の結果を見ることが出来なかった臆病者たちで溢れていることだろう。

「おまえまで来るとは、思わなかったな」

携帯電話を拾い上げながら、立ち上がる。山田はつまらなそうに鼻を鳴らして、自分の携帯電話をポケットにしまいこんだ。

「そういうおまえだって。わざわざこんなところにきてるんじゃないよ」

「時間を潰してただけだよ」

「ははあん。待ちぼうけくらったのか。それで、一人でライバルの晴れ姿を見る勇氣もなく、携帯をラジオ代わりにして試合を聞いていたと」

「うるせえよ。いちいち全部当てるんじゃないやねえ」

「じゃ、そろそろ行ってもいいんじゃないか？ さつきそこで、黒沢さんと入れ違ったぞ」

「……なに？」

睨む視線がどうしても厳しくなる。山田はもう、にやけるのを我慢することが出来ないといった感じで、口の端を震わせている。

「さつきと行ってこいよ、色男。デートの約束があるんだろ」

「そんなんじゃないやねえよ。これのリハビリに病院いくだけだ」

唇を尖らせて、肘を山田の鼻先に突きつける。

山田はにやけ顔をそのままに、口の端をもう一度つり上げた。

「まだ続けるのか？」

「さあ……？」

それは、直樹自身にも分からない答えだったに違いない。だが、山田はそれ以上の答えを追及しなかった。

彼は、それでもいいさと、呟いて直樹の背中をぼんと叩いた。

それで話はお終いだった。

塩の匂いのする風が吹き抜ける。直樹は襟元を正した。深呼吸吸をひとつ。

いまだ気持ちの悪いにやけ面をしている山田を背に、直樹は屋上を後にした。

ふと、一年前の今の季節を思い出す。

あの頃よりも重くなった胸の内が、今は妙に心地よかった。

投手でない野球に手を出すのもいいかもしれないと、そんなこ

とを思わず考えてしまうほどに。

あの試合の結末を、彼女は今でも夢に見ることがある。

蒼穹に高く飛び上がった一つのボール。

何千人もの人間の想いが、そんなちつぽけなものに宿ることを不思議に思いながら、夏樹は歓声と悲鳴の入り混じる、あの独特の高揚感を思い返した。

バックボードの向こうに消えた、人々の想い。

全てを出し尽くし、バックボードを見上げていた彼の背中を眺め、夏樹はなぜか、彼が笑っているような気がした。

球場の誰もが気付かなかった。きつとグラウンドで一緒に戦っていた選手達でさえ、気付かなかったに違いない。だが、その笑みを感じた瞬間、彼女は自分の中で、それまでの心にあつたわだかまりが爆発したような衝撃を覚え、そこに新しく温かな感情が流れてくるのを感じたのだった。

机の上に置かれた携帯電話を覗き見る。試合は決着をみせた。マウンドで高々と両腕を掲げているのは、もちろん北村俊哉だ。

それを見る目に、多少の妬みが混じるのは仕方がない。だがそれ以上に誇らしい思いがあるのも事実だった。

彼がこの日本一の投手にライバルと認められ、そしてそれに相応しい試合を見せた事。そして、彼がそれを自分に見てほしいと言ってくれたことが、一綴りの出来事として思い出された。

——お前に見届けてもらえたら、

あの時の彼の言葉が、胸によみがえる。

彼はいつたい、どういう気持ちでそれを言ってくれたのか。

都合のいい考えが浮かんでしまい、頬が熱くなった。

紛らわすように鉛筆を取る。描けないことはわかっていた。それでも、手が自然に伸びただけでも、ずいぶんよくなった。

大好きだった祖父との絆を、進学のための道具に使ったことが、どこかで後ろめたく思っていて、ろくに絵が描けなくなってしまう一年前。

あの日、今日のようにキャンバスの前に座っていた彼女のところに、彼が。

ピピピッ！ ピピピッ！

そう、こんな電子音の携帯電話を鳴らせて現れたのだ。

「携帯電話は、学校に持つてきちゃいけないですよ？」

振り返る。美術室の入り口で、竹井直樹は携帯電話を操作しながら、扉に寄りかかって立っていた。

「おまえだって、持つてきてるじゃないか」

「私はいんです。休日出勤ですから」

「俺だってそうさ」

「先輩はダメなんです。最上級生なんですから、示しをつけてください」

彼は夏樹の無茶苦茶な物言いに、弱ったように頬をかいた。

「そろそろ、行こうか。おっさん待つてるだろ」

「ええ。そうですね」

席を立ち、二人一緒に美術室を出た。

セミの鳴く声が聞こえる。窓から差し込む真夏の陽光が、廊下を白く彩っていた。

右隣を歩く、彼の姿。その左腕に、自分の手をそっと絡める。彼が少しこわばるのが分かって、それが嬉しくて、楽しかった。

「ねえ、先輩」

動揺を隠そうと、そっぽを向いてしまった彼をつつくように。

「私、先輩に聞いてほしいことがあるんです。先輩から聞きたいことも。いいですか？」

返答には間があつた。期待と不安の入り混じった空気が二人を包み込む。

一瞬にも永遠にも感じられる一時のあと、彼はぶつきらぼうに呟いた。

「――」

その短い返答が、ひどく彼女の胸を温かくする。

陽光が、二人を照らしていた。だから、彼女には彼の頬が何色に染まっているのか、はつきりとわかった。

絡めていた腕を引く。

よろめき、近づいた彼の頬に、夏樹はふれるようなキスをした。